

能代おもしろ映画祭り

黒澤3作品を観賞

脚本家の加藤さん魅力語る

第8回「能代おもしろ映画祭り」は最終日の1日、能代市海詠坂の能代山本広域交流センターで黒澤明監督のモノクロ3作品を昔ながらの35ミリフィルムで上映したほか、同市出身の脚本家加藤正人さん（70）が「世界のクロサワ」の魅力を紹介した。



脚本家加藤さんの講演などが行われた能代おもしろ映画祭り（能代山本広域交流センターで）

日本映画を代表する監督として国際的にも評価の高い黒澤作品は、三船敏郎演じる浪人の痛快無比な姿を描いた「用心棒」（1961

年公開）、余命わずかを知った男が残りの人生を懸けて公園造りに奮闘する「生きる」（52年公開）、誘拐事件を描いた「天国と地獄」（63年公開）の傑作3本を上映した。

「黒澤明作品の魅力」と題した加藤さんの講演には市内外から約80人が参加した。

加藤さんは、黒澤監督は自身が手掛ける脚本も一流で「大谷翔平のような刀流の人だった」と説明。日本映画で刀で人を斬る効果音を初めて使ったのが「用心棒」だとし、「誰もやらなかったことをやる一流の監督だった。普通の面白さだけでは満足しない。見るたびにうまいものだと感じる」と述べた。

「天国と地獄」は完成度が高く、興行的にも成功した

作品で、「面白さは黒澤作品の中でもトップクラスの傑作」と絶賛。「生きる」は回想場面のつなぎ方が巧みで「名作中の名作」とたたえた。脚本を手掛けた橋本忍さんは「七人の侍」「砂の器」「八甲田山」など日本映画史に残る作品を幾つも脚本しており「日本一の脚本家だ」と思う。読み直すたびに勉強になる」と説明。橋本さんの著書「複眼の映像」の後書きを依頼されたことには「脚本賞をもらうよりうれしかった」と語った。

黒澤監督は完璧主義者で妥協を許さない厳しい演出でも有名で、撮影のために横浜市の川をわざわざ汚してドブ川にしたり、望遠レンズを使うため通常の何倍もの照明を設置したりした

裏話や、黒澤監督、三船敏郎のルーツがいずれも秋田

なことなどを紹介。黒澤作品のような名作は一生心に残る。一生の宝物になる」と名作の観賞を呼び掛けた。能代図書館では、クリスマスに起こった奇跡を描いた「素晴らしき哉、人生」と児童向け短編映画を上映した。

2日間にわたる映画祭りを主催した実行委員会の川添能夫代表（78）は「予想を上回る来場者で、心に残る企画となったと思う。加藤さん、笠井清さんの能代出身者が協力してくれた意義も大きかった」と話した。